

別紙標準様式（第7条関係）

会 議 録

会議の名称	令和6年度第3回枚方市支援教育充実審議会	
開催日時	令和6年9月5日（木）	15時00分から17時00分まで
開催場所	枚方市役所 第3分館 第4会議室（旧市民会館3階）	
出席者	会長 相澤 雅文（京都教育大学） 委員 小出 伶奈（枚方市立小学校保護者） 委員 井村 恵美（市民） 委員 廣井 理恵（枚方市立中学校保護者） 委員 牧村 剛（枚方市PTA協議会） 委員 奥野 睦美（枚方市立小学校支援教育コーディネーター） 委員 野口 晃菜（一般社団法人UNIVA） 委員 東野 恵子（枚方市立中学校支援教育コーディネーター） 委員 渡邊 かおり（大阪弁護士会 萩の木法律事務所） 委員 柏木 充（市立ひらかた病院） 委員 小寺 鐵也（種智院大学） 委員 武田 正道（枚方市立小学校長会） 委員 村上 徹（枚方市立中学校長会）	
欠席者	副会長 山下 敦子（神戸常盤大学） 委員 奥出 久実（大阪心理カウンセリングセンター）	
案 件 名	（1）支援学級で行う自立活動について	
提出された資料等の名称	資料1 自立活動について（枚方市立津田小学校） 資料2 支援学級における自立活動について（他校の取組） 資料3 自立活動（枚方市立第二中学校）	
決 定 事 項		
会議の公開、非公開の別 及び非公開の理由	公開	
会議録の公表、非公表の別 及び非公表の理由	公開	

傍聴者の数	0人
所管部署 (事務局)	学校教育部 支援教育課

審 議 内 容

<開会>

(会長) それでは、定刻となりましたので、令和6年度枚方市支援教育充実審議会を始めさせていただきます。本日は、公私お忙しい中、本会議へ御出席いただきまして、委員の皆様ありがとうございます。

それでは、まず事務局から本日の委員の出席状況と傍聴者について報告をお願いいたします。

(事務局) 本日の委員の出席状況ですが、委員15名中13名の出席をいただいておりますので、枚方市附属機関条例第5条第2項に基づき、本会議が成立していることを報告いたします。また、本日の傍聴者はございません。

以上です。

(会長) ありがとうございます。

前回の第2回では、枚方市の通級指導教室における状況について、その学びの様子や通常の学級担任との連携等について事務局より説明をしていただき、小学校・中学校ともに学校現場からの現状を伺うことができました。さらに、前年度まで小学校の通級指導教室担当者として子どもたちを指導されておりました、枚方市立長尾小学校の江藤先生から通級指導教室を利用している子どもたちの実情や実践について、それから通常の学級でどのように力を発揮するための手だてについて、それから通常の学級の充実が全ての子どもたちにとって大切であるというような共通認識の下で学校全体が連携して共通理解に努めているといった内容の御報告をいただきました。

第2回の会議の内容を受けまして、通級指導教室の在り方について、委員の皆様と認識等について小出委員から確認と共有いただきたいことがあるということを伺っておりますので、ここで5分ほど時間をいただいて小出委員からの御提言をお願いしたいと思います。

それでは、小出委員、よろしくお願いいたします。

(小出委員)

お時間いただきありがとうございます。

通級の全校設置に対して少し引かかる点があり、設置自体には反対ではありませんが、この状況で全校に設置する結論には同意ができません。

大きく分けると二つの理由があります。

一つは、前回の会議中に出た通級の制度による課題が、学校現場や保護者に対する回答としては現状不十分だと感じる点です。

二つ目は、ここ2年で、通級の設置を急速に拡大させた枚方市ですが、通級の制度の案内を保護者や学校に案内するときに、「支援学級だったら通常学級ではないけれど、通級なら通常学級になります。」という内容で話されていたように思います。「こっちなら通常学級でいけますよ」と、通級のセールストークのような案内があり、何が起ってきているかという、深刻な言い方をしますが「通常学級と支援学級の差別化」です。

支援学級を利用している保護者の方から聞いた体験談では、通級を利用している保護者の方から「うちは通級やから通常学級やねん」と言われたそうです。それを言われた支援学級を利用しているお母さんは、「今までこんな風に言われたことなかった。支援学級を利用している子は自分の子たちとは違う、よそものと言われているみたいに感じた。新しく通級ができて、こんなふうに差別の意識が始まっていくんやな。」と悲しそうに話されていました。

枚方市は、支援学級の子も〇年〇組の一員として一緒に過ごしてきた全国でも珍しい地域だと思えます。通級を増やしていく中で、保護者や学校への案内をする立場の人たちが「通級なら通常学級のままでいけます」という言い方をするのを私自身何度も聞いたので、その伝え方は今後やめていただきたいです。在籍云々ではなく、支援がどれくらい必要な状況なのかで判断してほしいと思います。

今、利用の希望人数が少ない学校にも通級の設置を進めようとされていますが、差別が生まれていくなら、まだニーズが少ない段階で、急いで設置する必要もないと思っています。

クラスの一員という認識の要にもなっているダブルカウント(市独自の少人数学級編成)が、今年度初めて先生が足りず、9つの学年が実施できませんでした。ダブルカウントの存在は、新しくなった支援教育の案内資料のどこにも載っていません。これから、どんどんクラスの一員ではなくなっていくのか、昨年の審議会でもダブルカウントはなくさないという結論になったと思いますが、教育委員会や市の方でこのことがしっかり共通理解されていないように感じます。

通級を全校設置しました、その過程で支援学級の差別が生まれていくかもしれない、ダブルカウントも知らない間にどんどん実施できずになくなっていく、となっては枚方の支援教育は後退です。今まであった「クラスの一員」だということがなくならないためにも、ダブルカウントの件は、答申の最初に載せてもらいたいのです。4.27の文科省通知からずっと不安な支援学級の保護者を安心させてほしくてこの意見になりました。

長くなりましたが、委員の方々、答申の件で反対あればご意見お願いいたします。以上です。

(会長) ありがとうございます。小出委員から御意見をいただきました。

委員の皆様から御意見等がございましたらお願いします。

支援学級と通級指導教室、今現在、枚方では通級指導教室を設置するというようなこと

が進められていると思いますが、その中で差別的な発言があるというような現状を耳にしているということですね。

それにダブルカウントという、これまで枚方市が行ってきた通常の学級にも在籍していて支援級にも在籍しているというような、その在り方についてのもう少し広報をしっかりとして行ってほしいというような御意見であったかというふうに思いますけれども、いかがでしょうか。

(井村委員) 全面的に共感します。そもそも支援級、通級、いろいろこうカテゴライズすることということというのが、多分やりやすいことなんだと思いますが、子どもはみんな一緒に、どの子も障害あるなし関係なく、国とか言葉の違いとか性差別、性が関係なくみんな同じというところが一番何か根っこ、中心に持っておいてほしいというのがあります。

なので、その意識があつたらそういう言い方にはなつてなかつたと思いますが、どうしても何かカテゴライズすることというのが結構日常的に障害のある子を育てているとすごく多くて、支援級、通級とか、そういうだけじゃなくて、私自身はとても意識の中ではすごく嫌な思いをし続けているということは、ここの委員の皆さんに知っておいてほしいなと思います。以上です。

(会長) ありがとうございます。

学校としての説明の在り方、通常の学級と、それから支援学級、それから通級指導教室の説明のときの言葉の使い方であるとか、そのダブルカウント、基本的にはみんな通常の学級に在籍しているという考え方、そういったことを大切にしていってほしいというような御意見であったかと思いますが、日本の今の制度ですと、ある程度クラス分けというのが連続性のある学びの場というのが準備され、そこで学ぼうというようなことというのは、それは今の状況の中には、ある程度仕方のないところというのがあるわけですけど、その意識の中で、みんなと一緒に学んだというしっかりとした意識を持っていただくことが枚方市の理念の中にも当たられているというふうに思います。

そのほか御意見のある方いらっしゃいましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

(野口委員) 今後の予定を忘れてしまっているんですけど、今後議論する中で、就学支援の在り方についてこれまでも話してきたと思いますが、何か今後それについて改めて議論するみたいな場ってありますか。

この説明の仕方にも関わってくるのかなと思いますが、まずお聞きしてもよろしいでしょうか。

(会長) はい。事務局ではどうですかね。次回、将来の学びの場の選択について、話し合いを第4回で行っていかうというような方向性というのがございますし、それから基本的に就学に向けての相談ということについては、これまでも話題には上ってきたかと思いま

す。どのような体制で行っているのかというふうなところが自治体によってはかなり違いがあるというふうなところもございますので。

この点についてはどうでしょうか。事務局から何かございますか。

(事務局)

今回は将来の就学についてご議論いただく予定にしておりますが、先ほどの野口委員からありましたように、就学支援についても議論いただきたいと思います。それでもよろしいでしょうか。

(会長) はい。できたらその就学に支援、学校に上がる時だけではなくて、その後のことですね。いわゆる支援学級から通常の学級への変更も含めてお話しをする場というのを第4回の審議会で設けていきたいというふうに考えておりますので、よろしいでしょうか。

その中でも、また小出委員から申し出ていただきました通級指導教室と支援級の在り方であったり、いわゆる就学の進め方というふうな御意見をいただければというふうに考えていますが、野口委員、いかがでしょうか。

(野口委員) ありがとうございます。例えば、今かなり多くの自治体ではそもそもこの就学通知を出す時点で全員通常の学級に在籍するということをしています。例えば、国立市では、通級や支援学級を本人や保護者が選択したい場合は選択していくという。基本的には原則通常の学級に全員が在籍するというのを自治体として推進されている自治体もありますので、そういった点、通級を設置すること自体への、小出委員の御批判というのは、そもそも分けていくことへの今の井村委員のお話だったのかな。本人が分けられたくないのに分けられるみたいな、という状況への御批判なのかなというふうにも思いましたので、この就学支援の在り方、就学をどういうふうに通知していくのかというところとかもすごく関連してくるのかなというふうに思いましたので、何か次回その点も含めてちょっと議論ができるといいのかなと思います。

個人的には通級は全校設置賛成していますし必要だと思っています。やっぱりそれを利用したい方が今設置されてないからニーズがないというふうに見えるだけで、設置されることによって、それを利用したいという方もたくさんいる。これは別に枚方市だけではなくて全国であるので、ただ本人が利用したくないのに利用させるということはやっぱりよくないと思うので、基本的には通常の学級で全員学べるようにした上で、それで通級を利用したい人が利用していけるような、そういう仕組みにしていくのも一つなのかなというふうに思って御意見させていただきました。次回、詳しくお話しできればいいのかなと思いました。以上です。

(会長) ありがとうございます。

日本の場合、スペシャルサポートエデュケーション、特別支援教育というふうに訳され

ていて、特別なことを行われるような印象がありますが、それではなくて個に必要な支援をどう考えていくのかという。個別最適化という言葉もね、日本ではやっとな出てきておりますけど、その子にとって何が必要なかを考えていくというようなことが非常に大切なことだと私もそう思っておりますので、今の野口委員からの御意見というのはよく理解できるところでございます。

それでは、今日の議案もありますので、今、小出委員からお申し出いただいたところ、それから井村委員、それから野口委員からの御意見いただいたところについては次回も少し議論するというような形で進めさせていただけたらというふうに考えております。ありがとうございます。

それでは、本日はこれからの枚方市としてめざす支援教育における自立活動の理想的な在り方、それから障害の状況に応じた自立活動の在り方、そして自立活動の取り組み方等について共通認識を図っていきたいというようなことでの議論をしていけたらというふうに考えております。

枚方市の小学校、中学校の中で支援学級での自立活動、どのような取組がなされているのか。それから支援学級と通常の学級との連携、どのように行われているのか。支援学級在籍児童のサポートについて、どのような形なのか。小中学校間でのその連携がどのように進められているのか。そこで、今も出ましたけど本人、保護者の思いというところをどう大切にしているのか。それから将来的な学びの選択というようなことだと。それについて御紹介をいただきながらというふうなことを考えております。

最初に、本審議会の委員でもある津田小学校の支援教育コーディネーターの奥野委員から、小学校支援学級における自立活動の実践について紹介をしていただきたいと思いますと考えております。

続いて、第二中学校の支援教育コーディネーターの東野委員から、中学校支援学級における自立活動の実践について御紹介をしていただいて、その後でいろいろと皆様からの御質問等、議論を進めていけたらというふうに考えております。

それでは、まず奥野委員、よろしくお願いいいたします。

(奥野委員) 津田小学校で支援コーディネーターをしております、奥野と申します。よろしくお願いいいたします。先ほど相澤会長から御紹介があったように、自立活動について本校の取組を中心にお伝えできたらと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいいたします。

津田小学校の取組についてお話しさせていただきます。よろしくお願いいいたします。

最初に、支援学級での自立活動の取組、1番についてお話をさせていただきますと思います。

支援学級ですが、主に二つの学習について取組を御存じのとおり行っています。

まず一つは、教科指導です。ここが中心的になってくる部分もありますが、主に国語や算数を一緒に勉強することが多くなっています。児童一人一人に応じて、その子の学年の教科書の内容や、当該学年の内容をするわけではなく、下の学年に遡りながら、その子の苦手なところやつまづいているところに遡って学習をすることや、また、教科横断的な学

習を行う場合もあります。どの学年の内容を学習するにしても、児童が落ちついて学習できるように、少しでも学習を理解できるように、児童に合った学習方法を工夫しています。机に座って勉強する以外にもホワイトボードを使い、その子が集中できるように気をつけながら学習を進めています。

もう一つが、先ほどお伝えした自立活動になります。ここが子どもどもたちの課題に沿ったとても大事な部分になってくるかと思えます。児童一人一人の困難さや課題を把握して、それを改善し軽減するために行う学習になります。週1時間以上行っていますが、児童の内容や児童の実態によって1時間じつくり自立活動をする時間もあれば、1日10分間を毎日繰り返しながら形態を変えながら行っています。1対1で行う場合もありますが、集団で行う等いろいろな活動をいろんな形で行っています。

次に、支援学級での自立活動の取組について、詳しくお話しさせていただきます。

自立活動の少し指導領域についてお話しさせていただけたらと思います。

表にあるように、自立活動には六つの指導領域があります。学校によってそれぞれだとは思いますが、本校では、その授業の初めに子どもたちにできるだけ分かりやすい言葉で、こういう自立活動をするよということを伝えて、児童がどんなことを今から学んでいくのかというのをはっきりさせた上で始めるように心がけています。6区分を基に今から自立活動のお話をさせていただけたらなと思っています。

まず、1つ目の健康の保持についてです。私は子どもたちの体に関する勉強だよと簡単に説明していますが、生活習慣や自分の体の状態に関する項目になっています。写真にあるような、ストローを吹いている男の子がいると思いますが、舌の動かし方に少し不器用なところがある児童ですが、この児童とはストローを使って息の使い方を勉強したり練習したりしています。その下の表は、よく教室などに貼ってある表かと思うんですが、声の大きさの調整が学級で難しかったり、なかなかうまくいかないお子さんがいたら、その子と声の適切な大きさを示した物差しを使って学習をしたりということをしています。

2番目の心理的な安定についてです。これは気持ちに関わる勉強だよと伝えていきます。気持ちのコントロールや自分の生活上の困難をいかに克服していくか、ちょっと難しいですが学んでいます。情緒の安定を目的とする児童とはゲームをしながら、この丸い青いカードですけれども、ゲームを通じて勝ち負けの際にどうやって気持ちを表していくか。勝ったとき、負けたときの気持ちの表し方などを勉強する。あとはスポーツマンシップといった勝負ごとのルールなども勉強することがあります。

また、自分の気持ちの表現の仕方について、こういう気持ちの表現の仕方があるよ、こういう表情を見たらこんな気持ちになるんだよというような勉強をしたりすることもあります。

3番目が、人間関係の形成に関する学習です。ここは人との関わりの勉強だよと伝えていきます。ここでは他者の関わりや他者理解、集団への参加を目的とした学習を行っています。津田小学校では、ピアーズプログラムという高学年対象にソーシャルスキルを目標と

とした学習を行っています。そういう友達同士で関わり方を学習する、勉強したりする時間であったりとか、あとは下にあるような、こんなときどうしたらいいかなという正しい行動について学ぶということを行っています。

4番の環境の把握では、感覚や認知能力に関する課題、ちょっと難しいですが、見たり聞いたり覚えたりする勉強だよというふうに子どもたちには伝えていきます。例えば、短期記憶がなかなか難しいお子さんには記憶力が少しでも高まるようなトレーニングを行ったり、眼球運動に少し課題があるかなという子さんとはビジョントレーニングを行ったりしています。

5番目の体の動きです。ここはそのまま動きという言葉で説明をしています。例えば、日常生活に必要な体の動きが少しぎこちないお子さんとか、そこに不器用さがあるお子さんと指先を使って練習、細かな動きの練習をしたり、あとは体を動かして運動面の練習をしたりということを行っています。その写真にあるのは魚釣りゲームで細かい動きを楽しみながら練習している様子だったり、新聞をどれだけいかに細かくちぎれるかというゲームを試したり、楽しむことができるようにできるだけ工夫をしています。

6番目の、コミュニケーションについてです。これは話すことと説明をしています。ここではそのままですが、コミュニケーションを友達同士で上手に取れるような練習を行っています。私と児童の写真があるとは思いますが、実際に練習で会話をして、こういう会話の仕方がいいよね、こういう言い方がいいよね、こういう言い方はちょっとよくないよねということを実際に練習しながら、クラスでも自分の学級でも生かせるように練習を行っています。

ドラえもんを使ってドラえもん持っている人が今は話せるよ、他の人は聞いておこうねという会話の練習をする。すごろくを使ってコミュニケーションを取りながら、すごろくで楽しむというような活動を行っています。写真にあるのはほんの一例で、必ずしもその区分ごとに別々に指導しているわけではなくて、相互にいろいろ関わり合いがあるんですけども、こういった視点を大事にしながら自立活動を行っています。自立活動は週1時間だったり、1時間内に10分だったりという時間ですけれども、楽しみながらできることが多いので、子どもたちもすごく楽しみにしながら取り組んでくれています。

支援学級在籍の児童は、やっぱりクラスでちょっと困ったことがあるとか、これができるようになったらいいなということを抱えている児童が多いので、支援学級において、自分の課題と向き合いながら学習するとともに、自分のいいところとか得意なところを伸ばしていくことや、訓練とか学習とか練習という、やらないといけないという感じではなくて楽しみながらチャレンジしていけて自分の自信を持ってクラスでも頑張れるということを大事にしながら日々取り組んでいます。

ただ、担任の方がいろいろこんなのかな、あんなのかな、と考えていても、この子にはちょっとはまらなかったのかな、これで力がなかなか伸びなかったかなということももちろんあるので、日々試行錯誤しながら授業を行わせていただいています。

津田小学校の実践は、以上です。

(会長) はい。ありがとうございました。東野委員、中学校での自立活動の取組について御紹介をお願いしたいと思います。

(東野委員) はい、お願いします。

今、津田小の奥野委員の話をお聞かせいただいて、私も小学校でも似たようなことをされているので、そういう意味では小中の連携と申しますか、同じようなことをしているのであれば子どもたちも連続性をもって自立活動に取り組めるのですごくいいなと改めて感動しておりました。

小学校と中学校の違いというところも含めてちょっとお話しさせていただきたいのですが、やはり中学校になると、小学校ではできていたのに中学校になると気持ちの面では思春期ということもあり、なかなか支援に来ることができない子も増えてきている。それから自立活動になるとちょっと照れが入ってなかなか進まないという子も実際います。

そんな中で、本校では、次年度に向けて3月の初めに、必ずどの学年も保護者の方と本人と、それから支援コーディネーターと面談をさせていただいた上で、この1年間でこんなことができるという目標をみんなで決めて、その目標を少しでも達成に近づけるようにということで自立活動を一人一人違うものになりますが設定させていただいています。

先ほど、奥野委員からもありましたように、中学校も1日1時間自立活動を行うというときよりも、1日10分ぐらいをこまめに行うというときのほうが多いです。というのも、やはり進路がこの先に控えていますので勉強も頑張らせてほしいという保護者もすごく多くいらっしゃいますので、学習も含めの中で10分間自立活動しようという時間が多くなっています。

同じく、6区分に分けて御説明させていただきます。

まず、健康の保持についてです。この写真なんですけど、真ん中の左上にいる生徒さんなんですけど、彼は週1回一、二時間支援学級にだけ登校しているというお子さんなんですけど、大勢が前を向いているという教室の空間が無理だということです。例えば、グラウンドで体育しているという状況でも、そのグラウンドの前を通れないんだというお子さんなんですけども、何曜日の何時間目にグラウンドに人がいないので、この時間に支援学級においてというのを話しさせていただいて、決められた時間に起きて、この曜日のこの時間に行くんだという生活リズムを崩さないようにして、保護者の方と何とか協力をいただいて、この曜日のこの時間だけというふうに登校しているお子さんです。すごく作業が好きなので意欲的に頑張っています。

同じ健康の保持の中でも障害の特性の理解と生活環境の調整に関することです。このカードは何かと言いますと、すごく友達関係は良好なんですけども特定の友達とのコミュニケーションはできますが、SOSを出すのがすごく苦手。特に大人に言うのが苦手なお子さんがいらっしゃって、クラブをしている中で、この時期は雷が鳴って途中で急に中止になっちゃうというときがあります、そういうときにデイサービスのお迎えがあるんですが、ちょっと早めに迎えに来てもらわないといけなくなる。でも、職員室にSOSを出し

に行けなかったということで、お迎えを2時間待ったというお子さんがいらっしゃって、すごくそのとき不安だったというのを後から聞いたという事案があり、どうしようかなと保護者の方と本人と相談した上で、このカードを持って職員室に行く練習をしてみようというところから始めて、今このカードを持ってきてもらうということが2回ぐらい成功してはいますが、そういった取組をしています。

続いて、心理的な安定についてです。状況の理解と変化の対応に関することということで、この写真は3年生とのお別れ会というものをしたときに、生徒たちですごろくを作って楽しんだという場面です。ちょっとかわいいポーズを取るだとか、3年生が必ず止まって自分たちにありがとうと言ってというコマがあるんですけども、子どもたち自身で作っている所以我们よりすごく面白い、そんなところを聞きたいんだということとか、お母さんのいいところを三つ言うとかというのも恥ずかしながら言ってやったんですけども、この画面で言うと場面緘黙の生徒さんがいて、特定の先生と2人きりでしか授業ができないというお子さんもいらっしゃったんですけども、その子も最後、先生に言われたポーズを真似してかわいいポーズを取って、すごいかわいって言われたら照れながら、もちろん言葉を発することはなかったんですけども、みんなとコミュニケーションを表情で伝えながら楽しんだということがありました。こういったこともやっています。

同じく、心理的な安定で状況の理解と変化への対応に関することで、これはマイタイムという時間を作っています。50分の授業の中で残り10分は自分の心を安定させることを何でもしていいよということで、キーボードを弾く子、それから絵を描く子、それから得意ではないけどギターを弾く子とかがたくさんいます。その中で、左側の写真の左の女の子は2年生のときにちょっと体調がコロナの後の後遺症ということでなかなか体調が戻らなくて、2年生のときはほとんど欠席していた子なんですけど、2年生でギターを弾きたかったんだけど弾けなかったのでギターを教えてほしいなといった、弾いている男の子、コードしか弾けないんですが「教えて」って3年生の子が2年生の子に聞くという場面がすごいほっこりした場面がありました。こんなふうにしていろんな学年の子が自分の得意を披露しながら心の安定を保っています。

人間関係の形成についてです。他者との関わりの基礎に関することということで、こちらはだんだん思春期ということで異性というものを意識し始めるというのがすごく強くなってきて、人との距離感というのがなかなかつかめなくてというお子さんも増えてきます。そのような中で近い人、とても近い人というその区分がある中で、こちらはLITALLICOの教材を使わせていただいて、普通であれば近い人という友達というレベルなんだけど、もうちょっと話ししたことがある人は近い人と認識しているとかというのが、私たちのその会話の中では分からないので、こういったワークシートを使ってみてどういうふうに感じているのかなというのを見てみたりして、実はこんな部活のちょっと仲いい子とかも近い人になるんだなというのを感じています。

環境の把握についてです。この写真は何をしているところかといいますと、絵をこちらで用意するなど子どもたちが簡単な絵をちょっと描いて、人に伝えられやすい絵を描いて

みようということで、1人の子が書いて、それを口で伝える。次の子がそれを耳で聞いて絵で描いてみるというのを伝言していこうというゲームをやっています。簡単ですけども、へんてこりんになって子どもたちが何これ何これって言いながら言葉で図形を伝えるって難しいねと言いながら、認知や行動の手がかりとなる概念の形成に関することになっていくんですけども楽しみながらやりました。

続いて、身体の動きについてです。これは子どもたちが大好きな卓球です。手前の子は3年生で、奥の子は2人とも1年生ですけども、残り10分のマイタイムでも3年生に勝つんだと1年生が一生懸命頑張っています。

身体の動きということで、ビジョントレーニングや間違い探しというのもやっています。どうしてもスマホを見ること、タブレットを見ることが多くなってきて画面を注視することが多いので、右左の目の動きというのを鍛えようということでやっている子もいます。緘黙の子とかはこれをすごくやって、これを機にコミュニケーションを取ることもしていました。

コミュニケーションについてです。これは学校外に出て地図を見ながら探索しようというのをやっています。左側はコープ内の、この絵はどこにあるでしょうかというのをみんなでわいわい言いながら、これ知っているとか、これあそこにあるねんとか、これ分からへんとかみんなで会話しながら行きました。

2番はフィールド・ビンゴというのをやりました。歩いてどこでもいいから歩いて行って、これを見つけようというのもやっています。一番難しかったのがヘリコプターで、なかなか見つからなかったんですが、最後に本当にもう諦めかけたときにヘリコプターが来て、「ああ、来た」というのですごく子どもどもたちの思い出になっています。

最後、ふだんの写真ですが、以前、審議会でお話しさせていただきましたが、本校では一つの教室で1人の教師が数人の生徒というスタイルではなくて、一つの教室にみんなで集まって学習をしているというスタイルになっています。ふだんから関わりがあることで、ちょっとしたことでコミュニケーションが増えるかなということでこういう形を取らせていただいています。

ただ、どうしても音が気になるとか、1人になりたいというお子さんもいらっしゃると思いますので、そういうお子さんは別室や他の部屋での勉強という形を取らせているときもあります。

以上になります。

(会長) はい。詳しく具体的にお話しいただきましてありがとうございます。

小学校と中学校の支援学級での自立活動の取組についてお話を伺いましたが、委員の皆様から御質問等がございましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、続けて、支援学級と通常の学級の連携というようなことで、奥野委員、お願いいたします。

(奥野委員) 日々の支援学級と通常学級の連携についてお話をさせていただきます。ここ

がなかなか学校のほうでも課題がいっぱいあるところではあるんですけども、できる限り連携、共有ができるようにということでもいろいろ試行錯誤しながら津田小学校では行っています。

まず一つが、Google classroom というアプリを使った共有方法です。これは保護者向けに、子どもどもたちこんなこと頑張りましたよという連絡を毎週していますが、そこに校長や教頭、それから通常学級の担任、関わりのある先生にも入っていただいて、今日はこんなことをこの子は勉強してきたんだということが分かるようにアプリを活用して共有をしています。写真も一緒に送ることができるような機能があるので写真を送ったり、動画を送ったりというふうなこともできるようになっています。保護者の方と連携を取るとともに、教員同士も連携が取れるかなということで活用を行っています。

それから、学年付きということも津田小学校では行っています。学年会という会議を学年では持つことがあります、そこに各学年に1人ずつ支援学級担任も参加させていただいて、その学年の行事であるだとかどんな勉強をしているかだとか、児童がどんな様子なのかということと一緒に共有できるような時間を持つようにしています。

また、行事の話合いはもちろんです、その行事の練習だとか、当日も、その支援学級の担任と通常学級の担任が共に行動して一緒に児童を見ることができるよう、ほかの子も含めて指導ができるようにということを工夫しています。学年の会議に支援学級担任も参加することで、その学年が何をしようとしているのかだとか、学習内容の進捗であるだとか、通常の学級での児童の様子、ちょっとここ難しそうだったよとか、ここはこうしてあげたほうがいいんじゃないかなとか、合理的配慮はこうしたほうがいいかなという話をできるようになりました。今まで、今日こんなことがあってという時間を取ることがなかなか難しいところが課題だったんですが、その会議の月に1回、2回ではありますが、時間を決めることでじっくり話すという時間をつくれたかなと思います。なかなか共有する機会はこの二つだけでは不十分な部分もちろんなるので、いかに日々こんなことがあったんだよとか、こういうことどうしてこうということを話す時間を確保するかということが、まだまだ課題はあるかなと思っています。

それから、児童は支援学級での学習以外のほとんどの時間は通常の学級で過ごしています。ただ、支援学級の児童が学級でどんな勉強をしているのかな、どんな様子なのかな、合理的配慮は適切になされているのかなとか、ほかの児童との関わりは大丈夫かなというところがなかなか支援学級の担任からは見えづらいというところがあるかと思っています。

また、逆に、支援学級でどんな自立活動しているのかとか、どんな学習をしているのかというところが通常の学級の担任からもなかなか見づらいという部分があって、それぞれの学習内容がリンクしているのか、個別の目標等、その目標に応じた学習支援ができていくかというところがなかなか見づらい部分がありました。そこを解消していくことが児童の学びの深まりや自立に近づいていくんじゃないかなと思い、連携ができるように取り組んでいるところです。

連携については、以上です。

(会長) ありがとうございます。

それでは、東野委員の中学校での連携については、いかがでしょうか。お願いいたします。

(東野委員) 中学校は教科担任制なので、基本的には全ての先生方の情報共有が必ず必須だと考えています。ですので、何気なく話す時間の確保というのは、必ず教科の先生は1時間の授業が終わったら戻ってこられるので、今日こんなことがあって、この時間にこんなことがあってという共有は日々させていただいています。何気ない会話の中から出てくるという言葉の行動というのが、すごく次の時間に生かされるかなということで皆さんお話しさせていただいています。

それ以外にも、第二中では連絡帳というものを子どもたちに渡しているんですけども、そこに保護者に記入していただける欄があるんですけども、そこを必ず連絡帳を私たちが朝回収させていただいて、気になることがあれば朝に職員会議というのがあり、必ずそこで報告させていただいています。その連絡帳は日中どうなっているかという、必ず教科の担任の先生が出席簿というのを持っていかれるので、その棚に連絡帳を1人ずつ一緒に入れさせていただいて、今日また先生が連絡帳を授業に持って行って授業が終わったら戻すというシステムを取らせていただいています。ですので、誰がいつでも連絡帳を読める。逆に書き込めるというようにもしています。なので、例えば授業でこんな発表頑張ったよとかも書いていただけますし、次にこれを持ってきてねとかいうのも書き込めるようにさせていただいています。

二つ目としては、中学校では必ず支援担当が学年所属していますので、学年の会議というのは必ず入らせていただいています。なので、そこで支援学級のお子さんはどうですかという会議の中で話が出るので、そこで交流させていただいています。

週1回、生徒指導の会議というのもありますが、そこにも支援コーディネーターが参加させていただいて、子どもたちの様子を話させていただいています。

最後は、何より職員室で私がわーわー言いながら子どもたちの様子を伝えていますので、ちょっとしたことでも今日先生こんなことあったよというのを会話させていただいているのですごく助かっています。

以上です。

(会長) はい。ありがとうございました。

小学校と中学校の支援学級と通常学級の連携についてというようなお話をさせていただきました。

委員の皆様から御質問ございましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

一つお聞きしてもよろしいでしょうか。

お二人に小学校と中学校でということで、自立活動の課題についての共通理解というようなことについては、教科担任の先生、中学校。小学校はクラス、学級担任の先生とどれ

くらい行うことができているのかなというのをちょっとお伺いしたいなと思っているのですが、いかがでしょうか。

まず、奥野先生からお願いしてもいいですか。

(奥野委員) まず個別の教育支援計画という計画を年度最初に必ずつくりますので、そこでこの子はこういう目標でやっということを共に作りながら共通認識はしているところです。

ただ日々、目標がちょっとずつ変わったり、子どもたちの様子によって目標が達成できて、また違う目標にということにはなってくるので、そこはもう口頭で次こんなこと頑張れたらいいよねというやり取りをするという形になってくるかなと思います。

(会長) はい。ありがとうございます。東野委員、いかがでしょうか。

(東野委員) はい。第二中では4月の最初の会議で、子どもでもたちの画像も載せながら子どもたちの課題、こんなふうに1年間頑張っというのを1人ずつ職員会議等で話して共有させていただいています。

個別の教育支援計画は担任の先生とは共有させていただいていますが、教科担の先生とのリンクというのが実はできてなくて、すごくプライベートなものなので紙で回すということもできないですし、ここに入っている情報を見ておいてくださいということで終わってしまっているの、その辺りのリンクが今後の課題かなと思っています。

(会長) はい。ありがとうございます。

実は、なぜこういうことをお聞きしたかという、自立活動の評価を行うというときに、先ほどの話題の中にも出てきました人間関係の形成であるとかコミュニケーションというのは、通常の学級の中で発揮できていくというのがその評価につながっていくのではないかなというふうにして、その辺の連携とか情報交換というふうな辺りのところはどうかというふうにお聞きをしたんですけど、その点についてはどうでしょうか。

奥野委員からお願いしたいと思いますが。

(奥野委員) そうですね。そこももう会話になってくるかなと思いますが、子どもどもたちの日々の今日どうやったみたいな話から、うまくいったとか、いやちょっとけんかしてしまったりとか、やっぱりそうやって子どもどもたちとの会話から探し出すことが多いという部分と、やはりクラスに入り込むというか、クラスの中に入って子どもたちの様子を見るというのも一つだと思いますし、クラスの担任の先生に、ここのまわって行っていたかなというのをちょっと託すというか、見ておいていただいて後で聞くというものもあるかなとは思っています。

(会長) はい。ありがとうございます。東野委員はいかがですか。

(東野委員) 全く同じですが、私も会話の中から取り入れるのと、あと特活や総合という授業があるので、そこになるべく支援担は参加しているんな教室行って子どもたちの様子を見るようにしています。

(会長) はい。ありがとうございます。

もう1個だけお話しさせてもらおうと、自立活動というのはもともと特別支援学校、最初は重度重複のお子さんたちというところから、その子たちに明文化していきましょねというのが始まって、支援学校が中心に進んできたのが今回の学習指導要領の中で通級指導の子どもたちにもとか、特別支援、みんな支援級の子どもたちもというふうにだんだん広がってきているというのがあります。もともとは自立活動というのは時間の指導と時間外の指導というのがあるんですよ。それは道徳と似ていて特別の教科、道徳という時間の指導と、それから道徳教育というのは学校の教育活動全般で取り組んでいきましょねということになっていると思います。それと似ているように時間の指導というのと、それから自立活動の学校生活全体で取り組んでいく自立活動というのも本来はあるべきだというふうに僕は考えていますが、そこが結構置いていかれていって時間の指導だけというような意識というのが強くなっているのではないかというふうなことがあると思います。

ですので、通常の学級の先生たちは自立活動の内容を知らないというようなことが起きていますが、その辺の理解を進めていくというような共通の話題として話せるようになってくる、私たちが話している、奥野委員も東野委員も話してらっしゃるので、そういったことというのがすごく大切になってくるのではないかなというふうに考えているというところがあったところでございます。

ほかの委員の皆様、御意見ありましたらお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。

はい、小出委員、どうぞ。

(小出委員) 私の学校は3階建ての校舎で2学年ずつ構成されている学校ですけど、1階から3階までどの階にも支援学級のお部屋が設けられていて、私の子どもの場合は、私の子どものクラスの隣が支援学級のお部屋なのですが、その支援担任の先生が大体いてくれるので、すぐにいろいろ聞けるという環境があるのもあって子ども同士で揉めているとかあったときにも支援担の先生が話を聞き取ってクラスの担任の先生にも、会話の中で情報共有しているそうで、今この授業も何やっているかというのも日々すごく連携されているのを見ていて思っています。自立活動のところですが、支援学級の時間に友達と揉めた内容とかを振り返っていろいろ話されていたりもありますし、実際に、じゃあ次はお友達にこう言ってみようというのをクラスの担任の先生にも伝えてくださっているようで、クラスの先生も実際お友達に伝えたときどんな反応だったとか、どういう状況だったというの、クラスの先生から支援学級のクラスの先生にすぐ伝えてくださっているというのも見かけたりしました。

コミュニケーションの面ではすごく連携しているのを見ていて、指先とか課題とか、今

クラスで何しているというのも支援の先生は常に気にしていて、今の何の時間しているのかなとすぐ見に行く感じ。毎回見に行くと、今こんなことしていたからこれしようというのもすぐ言っていたり、近い関係というのと、クラスの学習でタブレットを使うことが多いと思いますが、そのタブレットの資料を送るときも支援担の先生も必ず名前のところに入っていて、今クラスでどんなことしているかというのも常にできる限り分かるようにしてはるなというのをずっと思っていて、クラスの先生が今こんなことしていますよというのを支援の先生に伝えに来るというのもすごく頻繁に行われているのもよく見るので、私の学校のほうは、クラスが少ないのもありますが、すごく連携されているんじゃないかなと思っています。以上です。

(会長) はい。ありがとうございました。今、小出委員のお話にもありましたけれど、続いての話題というところで、支援学級在籍児童のサポートというところと、もう一つは、小中学校間での連携ということについてお話を伺うという予定にしておりますので、ちょうどいい振りをしていただけたというふうに思っておりますが。

(井村委員) すみません。さっきのところでもちょっとお伝えしたいんですけど大丈夫でしょうか。

(会長) はい。井村委員。どうぞ。

(井村委員) 相澤会長が最後におっしゃっていたようなことを、ちょっと似たようなことを私今感じていたんですね。とても丁寧に自立活動の取組してくださっているなと思ってちょっと感動していましたが、ただ、どもお子さんの個人に対しての何か自立活動を、どちらかと言えば親とか周りの大人の側の視点でこうなればいいな、こういうふうになれるようになればいいなというのをすごく感じていました。話を聞きながら。

私は去年ずっと自立とは一体何ですかというのをずっと聞いていたと思うんですけども、学校を卒業してからが本当の自立に向かっていく。その基盤づくりになると思うんですね。学校時代というのが。その自立活動という教科とか科目をするわけではなくて、本人が社会に出ていったときにどう自立していくかというのがとても大切なわけですよ。

そのためには、この子がどんなふうになってほしいかというよりは、この子がどう決断したいか、どんなふうに生きたいかというのが自分で決めて自分でどういう生き方をしたいかというのを考えていくようなことを促していく必要というのがすごくあるのと、あと周りの子どもたちに対しても同じだと思うんです。周りの子どもどもたちが、自分が何をすべきか、何をしたいかというのが考えられるということというのはとても大事なことだと思いますが、それプラス障害のある子にとっては今、障害のある人たちというのが社会の一員で、同じように自分が何かで苦しむ場合もあって誰かに助けてもらわないといけないということも、みんな一緒に共に過ごしていたら分かってくることですよ。そうなったときに、どうやって同じ社会をみんながハッピーに生きていけるかというのも学んでい

かないといけないというか、考えていく思考を養っていかないといけないと私は思っているんです。

だから、今、この学校を卒業するまでの間には、こういう目標を立てようというのは、それはいいと思いますが、それだけではなく、将来10年後、20年後、どうなりたいか、どうありたいか。その子にどんな力をつけてあげたいかという目標をしっかりとつくるというか、多分つくらないといけないのは本人だと思うんですね。その本人がどんなふうになりたいかというのを、そういうことが考えられる、考えることができ、自分がこうやりたい、こう決断するというふうなできるようになったときに私は自立かなって思ったりするところがあるんです。

だから、そういう何か促していくのと、できないところをどうサポートするかというのは本人がサポートするわけじゃないから、周りがサポートするわけだから、その周りのサポートと一緒に考えてくれる仲間をつくるとか、そういうこと、そういう意識を周りの子どもたちに持ってもらおうとか、みんなでやっぱりそういうことも一緒に育てていくということが、それこそ共に生きるという社会への実現のためだと思っているので、何かその意識とかも何か持っておいてほしいなというのがあります。以上です。

(会長) はい、ありがとうございます。今日のこれから先のところで、本人、保護者の思いであるとか、あと将来の学びの選択というようなところでお話をいただく予定にしておりますので、今の井村委員のお話については、そこで少しまたご議論できたらと思っております。

まず、支援学級児童生徒のサポートについてというところと、それから、小中学校間での連携をどう取っていったらいいのかといったようなお考え等について、奥野委員からまた御提案をいただけたらと思いますが、お願いいたします。

(奥野委員) 支援学級在籍児童のサポートについてお話を進めさせていただきたいと思えます。

先ほど、支援学級担任と通常学級担任の連携のところでも少しお話をさせていただきましたが、まず、時間割を組む際に、私は少し工夫をしました。その際にどう工夫したかというところ、できるだけ授業をうまく工夫して学級担任の先生に協力していただいて、授業のない時間を確保して、その時間を利用して通常の学級の方へ入り込みができる時間を確保しました。その時間はこの子に必ずつくというわけではなくて、そのクラスや学年、子どもたちの様子を全体で見回して学習のサポートができないかどうかを見ることや、先ほどもお伝えしましたように、合理的配慮がどうなされているかというところや、こんな配慮がもっと必要かなというところを見たり、あとは在籍以外の児童の困り感にちょっと寄り添えるようなサポートができないかななども行うようにしています。

これによって、通常でどんな勉強をしているか、どんな様子なのかというのが少し見やすくなってきたのではないかなということと、子どもたちをすぐにその場で困っているところをサポートしやすくなったかなと思っています。

また、枚方市で特別支援教育支援員を配置してくださっているというところも活用しながら、困っている児童の横で支援ができるようにということで、支援員さんもフルに活用させていただいています。

また、校内体制として校内支援委員会を設置しています。ここで月一、二回、学校の先生方と一緒に、在籍児童はもちろんのこと、通級指導教室利用の子どもたちの様子だったり、ほかに配慮の必要な児童がいるのではないかという話をしたりだとか、また、不登校のお子さんだったりということでもいろいろな話をして子どもたちをどうサポートしていくかということをお話合っています。年2回、全職員で、配慮がいる子どもたちに対して情報を共有する時間も設定し、情報共有を行い、多くの目で子どもたちを見ていけるようにということをお話合っています。児童のサポートについては、以上です。

小中学校での連携についてです。ここが今までなかなかうまく連携できていなかった部分ですが、小中学校間でいろいろ話をしまして、支援教育コーディネーター同士の交流を始めるように今年度から始めました。何をしているかということ、学期に1回支援教育コーディネーターを中心に、支援担も時間があれば集まって、それぞれの学校の取組だったり情報交換を行うようにしています。なかなか小学校は中学校の支援学級でどのような学習をしているか、学習のシステムや教科担任制などシステムが変わるところで、どう課題と向き合っているのかとか、どう評価されているのか。進路指導どうしているのかというのが全くやっぱり分からないところがあったので、懇談でも6年生の保護者や児童に対してなかなかお話が難しかった部分が今までありました。直接、中学校に聞いてくださいということがあったんですけども、そこをできるだけこちらでも分かる範囲でお伝えできるように、中学校の仕組みや支援の内容などをお聞きするというのを今年始めました。初めて知ることが多かったので、そうだったんですねということをお聞きしながら、懇談で保護者の方に「これって中学校どうなんですかね」って聞かれた際にも答えることができるようになったかなと思います。

小学校の教員も中学校について知ることによって、その支援に在籍している児童も通級を利用している児童も、中学校でどうしていったらいいかな、どこの学びの場が一番適切かなというところを適切に選ぶことができるように、小学校のほうでも適切なアドバイスだとかお話をできるように努めているところです。小中学校の連携については、以上です。

(会長) はい。ありがとうございます。今年から中学校との連携ということ始めて、すごく効果的だというふうなお話をいただけたかと思えます。

続きまして、東野委員からも中学校のサポートであるとか、中学校区の情報共有、連携等についてお話をいただければと思いますが。東野委員、いかがでしょうか。

(東野委員) はい。支援学級在籍児童のサポートについてということで、第二中では二つの小学校から進学する生徒がほとんどですので、二つの小学校の支援教育コーディネーターの先生と連絡を取っています。

本校では、毎年6月にその二つの小学校から6年生の児童と保護者の方に来校していただき、現1年生の授業、それから支援学級での授業を見ていただき、保護者の方だけではなく、小学校の支援教育コーディネーターの先生も残っていただき、うちの中学校の支援学級というものの説明会をさせていただいています。小学校5年生とか4年生の方も来たいとおっしゃるんですけども、ちょっと人数が多くなるので6年生だけという形にはさせていただいていますが、そこで支援教育コーディネーターの先生にお話しさせていただくことによって、中学校の支援学級の内情というのを分かっていたいただいて、ちょっとそこで、まず5年生、4年生の保護者の方にコーディネーターの先生を通じてお話ししていただいているという形になっています。

その中では、実際の写真やこんなサポートを行っていますが、いろんなお子さんがいるのでどんどん、こんなこと困っているんですというのはもう6年生の段階からお話ししていただいても大丈夫ですという形で話させていただいています。それ以外の小さい質問もあり、大きい質問でも何でもいいのでコーディネーターの先生を通じて質問していただいて、実際に回答するということがあります。明日もあります、6年生の保護者の方でやっぱり心配やから、うちの子の話聞いてほしいという方もいらっしゃいますので、そういう相談とかというのも実際にやっております。

昨日だったかな。ある小学校のコーディネーターの先生から、今5年生の児童で、小学校でこういう状態で過ごしているんだけど、中学校に行ったらちょっとついていけないですよというふうに御相談いただき。そうですね、ちょっと難しいかもしれないので、このままだとちょっと難しいかもしれないから、こんなことを始めたらどうかとか、保護者の方と一旦相談しながら、どんなことができるかちょっと一緒に考えながらやっていますかというお話も実際にさせていただいたことをしています。

以上です。

(会長) はい。ありがとうございました。

お二人にお話をさせていただきましたけれども、御質問等がございましたらばお願いしたいと思いますが、皆様いかがでしょうか。

これから先の話とも関わってくるかと思いますが、自立活動の話を中心にとということですが、いわゆるこれから先の進路のことを考えていくということになると、やはり支援学級というのは枚方の高等学校では設けているところもありますけど、多くはなくなってしまうというようなことを考えると、これから先のことというのをどう考えていくのかというのが一つ課題になるかということもございますので。

それでは、先ほどの井村委員からのお話もありましたけれども、本人、保護者の思いであるとか、それから将来的な学びの選択に向けてというようなことについてお話しをお願いできたらというふうに思いますが。

奥野委員から、続けてお願いしたいと思います。どうぞ。

(奥野委員)

本人と保護者の思いについてです。少しずれがあるかもしれませんが、津田小学校では通級を利用する、支援学級に入級するというところに行き着くまでに段階を踏んだ学びの場の利用を決定するというところを進めているところがあります。入級までのステップというふうに書かせていただいています、そこを全校で共通理解した上で学びの選択をしています。そのときに、もちろん保護者の方の思いだとか、本人がどうしたいか、勉強をもっとしてみたいとか、こんなふうになってみたいという気持ちも大事にしながら、このステップに応じて学びの場を決定しているというところではあります。

まず、ステップを追っていきますが、ステップ1では通常の学級の担任の先生におけるユニバーサルデザインの観点を取り入れた授業を実施していきます。その中で、もしこの子は個別の支援が必要だな、ちょっとここでつまずいている、困っているなどということがあればステップ2に進んでいきます。

ステップ2では、担任や校内委員会にその子の話題を取り上げ、情報共有を行っていきます。もし保護者の同意があれば、そして子どもたちがそれでやってみようということがあるならば個別の支援を行い、授業観察を経てどんな合理的配慮ができるか、通常の学級でどんな支援ができるかということステップ2では考えています。

その授業観察を実施することで個別の支援がもっと必要ではないか。通級指導教室の利用が適しているのではないかという場合はステップ3に進んでいきます。ここで通級指導教室を利用して個別の支援を行うこととなります。

そこで成長が見られた場合は、通級指導教室の利用を終了しますし、継続的な支援が必要な場合は、本人に確認した上で、保護者の同意を得て、支援学級の入級について話を始めます。もちろん保護者の願いを全面的に聞く、子どもの願いを聞くというわけではなくて、学校の中でも校内委員会を通して、この子にとって適切な学びの場はどこなのかについて、しっかりと議論した上で決めていきます。

この子にとって、どのような支援が必要なのか、というアセスメントを実施します。通級指導教室の担当の教員が1年生で読みの授業を定期的に行います。そこで読みの力の伸びの度合いを見ることで、子どもの困り感やつまずきをアセスメントします。

通常の学級の先生が、個人懇談で保護者と、ちょっとここにつまずきがあるようです。ここはちょっと支援が要るかなというところをお話ししていただいて、平仮名教室ということ放課後に実施させていただいています。そこで平仮名の読みの力の伸びを見ながら、もしかしたら通級の利用が必要なんじゃないかな。いや、この子はちょっと力がついたから通常の学級で頑張れそうだなというところをアセスメントして利用を勧めています。

これらのステップを踏む上で大事なものは、表題にもありますような本人と保護者の思いです。本人がやっぱり学びたいとかやってみようという気持ちがないとなかなか支援というのは難しくなってくるというところがあります。本人の気持ちを聞いて、その上で保護者にこういうところで学ぶのはどうでしょうかといったところを聞きながら、学びの場が適切に選択できるようにということを行っているところではあります。以上です。

(会長) はい。ありがとうございました

それでは、将来的な学びの場の選択ということについても何かございましたらばというふうに思います。

(奥野委員)

将来的な学びの場についてです。先ほど中学校との連携についてのところでもお話しさせていただきましたが、中学校で適切な進路選択ができるようにということで、5年生の懇談会ぐらいから保護者の方には先を見通して、その子どもたちが将来在籍を継続して行って支援を継続することや、6年生からの退級に向けた取り組みについて必ず聞いています。必要に応じては5年生の時点で、中学校の見学に行っていただきます。小学校なのでどうしても中学校はどうするという話が一番先に来てしまいます。時間的な余裕を持って中学校でも学びの場を選択できるようにということは考えるようにしています。

6年生では、中学校の情報を基に、どんな力をつけた上で卒業して行ってほしいかということ子どもたちと一緒に考えて、中学校になったときに少しでも困り感がないように自立活動の目標を設定しています。

懇談会で中学校からお聞きした情報をお伝えしたりしながら、先々を見通してどんな力を小学校段階でつけるべきなのかを考えて自立活動を行い、その目標を設定しています。このことがすごく大事なことだと考えています。保護者の思い、教員の思い、本人の思いがあり、うまく行かなくて擦れ違うこともあります。最終的には、本人と保護者の方が納得した形で、その先を考えていけることができるようにという形を目指してお話を進めています。以上です。

(会長) ありがとうございます。

それでは、東野委員、中学校の場合はどうのような実践をされているのかということについて、お話をいただいてもよろしいでしょうか。

(東野委員) はい。中学校から高校に上がるについて、先ほどありましたように、高校に支援学級がないということが多いため、サポートが受けられなくなるということが多いです。中学校から高校に上がる時の選択肢はすごく増えます。増えることで保護者のいろいろな条件も出てきます。それはお金の面、学力の的と様々です。そういうのも全て加味した上でスムーズに進学できるように、うまく連携できるようにサポートが少しでもあればいいなということで、中学1年生のときから、学校の合同説明会やオープンスクールなどのチラシが3年生には届きますが、なかなか1年生の分が届かないということが多いため、支援学級のclassroomを通じて、それぞれの学年にチラシや情報を、提供し早めに意識しながら、なかなか小学校6年生で卒業してすぐ中1上がって、すぐこの夏休みに見に行くというのは難しいという方もおられますが、どんな学校があってもどんなサポートが受けられるのかなというのを少しでも感じてもらえたらなということで配信させていただいています。その上で、次の進路に向けて、まず子どもたちがどんなことに興味があって、

こんなサポートがあったらこの学校で3年間続けられるかなというのを意識しながら学校を見ていただきたいなというのを懇談のときにお話しさせていただいて、保護者に行っていただいています。

選択肢としては私立高校、公立高校、府立支援学校という選択肢がありますが、今まで支援学級担任をさせていただいた実感の中で、やっぱり私立高校のサポートが多いので私立に行きますという保護者の方が多いというのは実態として感じています。以上です。

(会長) はい。ありがとうございます。

奥野委員から、少しずつ支援を増やしていくという形で、その選択、どうしていくのかというステップを図っていく。本人・保護者の思いを中心としながら図っていくというようなことのお話だったと思います。

支援学級を活用している子どもたちの1日1時間という子から、様々なタイプの方たちがいらっしゃるかと思うんですけど、例えば、1日1時間の支援級の活用という子どもたちを途中で通常の学級に戻っていくというような取組などについてはどうなのでしょう。行われていたりするケースもあるということでしょうか。中学校、小学校ではどうでしょうか。その辺り通級指導というのを週に8時間まで通えるというふうになってはいますが、実際には通級指導も週に1時間か2時間。毎日1時間通っているというのが支援級の子どもたち、最低限の条件というところですけど、1日1時間通っている子どもたちの中には通常の学級、通常級の在籍だけに戻っていくというような子どもたち、児童生徒の皆さんもいらっしゃるのでしょうか。

(奥野委員) はい。失礼します。通常の学級のほうに学びの場をだんだん戻していくということだと思いますが、退級をめざしている児童、すぐにじゃなくても卒業したら退級をしたいですとか、いずれは支援学級じゃなくて通常の学級でと考えられていらっしゃる方とは、じゃあ少しずつ学びの場を通常学級に戻していきましょかという話はさせていただきます。

そこで、例えば週何時間なら通常学級で頑張れそうかなとか、支援学級何時間やっぱり来たいという話も本人としたりだとか、それとか教室ではどんなことがあったら頑張れそうという話をしたりだとか、そういうふうなことを子どもたちと考えながら徐々に徐々にクラスでも頑張れるようにというところはやっている部分は高学年で多くあります。

あとは通級指導教室を利用しているお子さんが、この子は目標達成できたということがあれば卒業という形で利用しなくなるというのは大いにあります。

(会長) はい。ありがとうございます。東野委員、どうでしょう。中学校では。

(東野委員) 私が今までやってきた中で退級していきたいという子が実は1人もいなくて、それがリアルなんですけど。ただ、少しずつ授業数が減っていくというお子さんはいて、その中で一番退級が少なかった理由としては、保護者の方の希望というのがすごく大

きいです。子どもたちにいきなりその支援学級退級となったときに大丈夫かなって思われる方も非常に多くて、何かあったときのために先生たちがついてくれるというのは心の支えでもあるので、できたら在籍を継続させてほしいという方が多いです。参考にならないかもしれませんが。

(会長) ありがとうございます。先ほど、野口委員からのお話があったときも就学ということ考えたフレキシブルな対応というのがすごく今求められているという状況もありますので、その子の思いであることを考えて、どれぐらいの方がいらっしゃるのかなというところでお聞きしたところでした。

すみません。委員の皆様から御意見等ございましたらばお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

お話を伺っていると、非常に支援級の在り方、子どもたち一人一人の思い、それから保護者の思いに寄せて、それから一人一人のサポートというところ非常に手厚い取組というのが行われているというような、実践の在り方というのを伺うことができたかというふうに思っております。

(会長) 小出さん、はい。

(小出委員) すみません。小学校と中学校で退級したいと言っている人の件ですけど、現在、小学校で同じ学校ではないですが、退級をめざしている2年生の男の子の場合だと、来年度すぐに退級という目標ではないですが、少しずつ1日の時間を減らして行って、卒業前までにはもう完全に自分だけで学校生活が送れるようにというのはめざして、今もう減らす予定で支援学級の先生と話しているというのをお聞きした例と、中学校の場合で、もう卒業して3年以上たっている男の子の事例は、知り合いの方ですけど中学2年生の途中で本人が支援学級使わなくていいと言ったそうで、その子はもう小学生より前から診断を受けていて発達障害ではありますが、本人が自分の意思で支援学級抜けるという話をお母さんにして、お母さんはすごく心配だったしサポートを受けられなくなるし、テストでももうサポートは何もないけど本当に大丈夫かって言ったときに、本人はやると言ったそうで、それで中学3年生では1年間ずっとサポート、その支援学級のサポートはなしで公立の高校に進学して、その先の公立高校ではすごく理解があったようでサポートを受けているとは聞いていますが、本人の意思では退級できた。数年前にできているという方も一応いたというのをお聞きしたのでお伝えしました。

以上です。

(会長) はい。ありがとうございます。今現状の制度ですとね、特に支援学級であるとか通常の学級であるとかということによって支援が受けられるかどうかというようなことの分け隔てはないというふうに思っているところもありますが、その意思の表示の仕方というところもかかってくるのかというふうに思いますが。

(会長) 井村委員お願いいたします。

(井村委員) すみません。中学を卒業した後で高校受験あると思いますが、高校のほうは自立支援コース以外に配慮受験というのが大阪府はありますよね。そのときにね、結構な頻度で私はそういう方たちの支援、サポート、相談を受けていますが、重度と言われる知的障害のある人、私の娘も読み書きとかできないし言葉もしゃべれないんですけども、高校受験をして高校も行っています。卒業もしています。大体、毎年あなたのお子さんは、高校受験は無理ですよと言われる、言われたという方というのが相談に来られることというのが大体毎年1人か2人おられます。実際には、小学校のお母さんたちとかでも、もう小学生のときから結構その辺りとかの情報を得ようと来られる方とかもおられるので、その辺りちょっとしっかりと学校の先生たちの認識、読み書きができない、テスト受けられなかったら受験できないというのを勘違いされている方がたくさんおられるようなので、そんなことはないし大阪府の教育委員会からは配慮受験でこんなことを配慮できますよというプリントが中学に配られると思いますが、実は、そこに書いてあるのは基本的な部分であって、それ以外の配慮とかも個別にすごくしていただける場合がある。案外支援学級がなくても手厚くサポートもしてもらえたりとかもあるので、そこをちょっと保護者の方にはしっかり伝えてあげてほしくて、やっぱりその情報を持っている人と持っていない人の差がすごく大きいんですよ。高校まで行かれて、高校入ってからちょっとしばらくは先生たちが慣れてなかったら中学とは違って大変な思いする場合もあるんですけど、もう卒業する頃にはすごくなんかいい感じの雰囲気になっていたりとかして、その後、大学受験される方とか大学の聴講生でいかれる方とか結構な割合でおられるので、そこまでいくと支援学校の高等部行ったときと全然世界が違ってきたりとかもするパターンがあるので、もちろんどちらがどうかというわけではなくてね。なので、やっぱり本人が進みたい道に進めるようには情報をしっかり伝えてあげてほしいなというのがあるので、これは教育委員会の方をお願いしたいなと思います。以上です。

(会長) はい。様々な情報があつてということも高校も今は様々な高校ができてきているというような形になっているかと思いますが、その情報の把握というようなことを中学校の進路指導の先生等にも周知をしていっていただくというような取組という形になりますかね。ありがとうございます。

それでは、よろしいでしょうか。時間もなくなってきましたが、ほかの中学校での自立活動についての情報ということで、事務局のほうからお願いしたいと思いますが。

(事務局) 津田小学校、第二中学校以外の数校に訪問しまして、支援教育コーディネーターに直接お会いして自立活動の状況について伺ってまいりました。

まず、小学校の自立活動においてです。

どの学校でも児童のアセスメントに基づいた個別の支援教育支援計画と個別の指導計画

を基に、直接、通常の学級における学習や生活などに還元できるための自立活動というの
も計画しているということでした。

また、自立活動だけの時間を45分行うというよりも、授業開始後の10分から15分
や授業終了前の10分から15分で自立活動に取り組むというモジュール的なものを行って
おるということでした。それによって子どもたちが自分の課題や困難さに向き合うことが
できる。また、自分が必要だと考えながら楽しい、できたと感じるができる自立活動
に取り組んでいるということでした。

課題として、自立活動で身につけた力が通常の学級でどのように発揮されるか、どのよ
うに発揮できたかと評価することに思考している学校があるということでした。

また、自立活動に対する本人、保護者の理解を進めている途中であるということをお答
えいただいた学校が何校かありました。今後、自立活動について御理解いただけるように
丁寧に説明をしていく必要があるということも伺いました。

小学校、中学校での9年間を見据えた自立活動を充実させることを目標としている学校
が多く、しかし、現状として、児童の実生活に還元できる自立活動に取り組んでいるが、
なかなか発揮できるための授業づくりはこれからかなという課題が見えてきたというこ
とです。教員が自立活動に対する理解の向上を図るために、支援教育コーディネーターが中
心となって支援学級の取組を参観してもらい機会をつくり、自立活動に特化した教員向け
の校内研修を実施するなど工夫しているということも伺っております。児童のストロング
ポイントを伸ばすための授業づくりや環境調整に取り組んでいる学校もあるということが
分かりました。

続いて、中学校です。中学校でも生徒の実生活に自立活動が還元できるようにというこ
とは、小学校と中学校と共通していることでした。生徒の状況にもよりますが、課題や提
出物に対してできる限り自分の力で見通しを持ち、取り組むことができるようにスケ
ジュール管理ができる力をつけるため取り組んでいるということでした。

課題についてです。中学校卒業後の進路について心配されているという状況から、本
人、保護者が学習の補充など求めている状況が少なくはないということで、卒業後にも求
められる力を自立活動の時間を通して獲得することが大切だということを理解してもらえ
るように丁寧な説明が必要だということも伺いました。

自立活動について、中学校の卒業後に求められる力について、先ほどもお話がありまし
たように、そのような力の習得を目指す学校が多く、しかし、現状として生徒のストロン
グポイントを伸ばしながら目標達成やスケジュール管理のスキルの獲得を目指して取り組
んでいますということも聞きました。そのために9年間を見据えた自立活動の積上げが必
要であるということも聞いております。以上になります。

(会長) はい。ありがとうございました。小学校の支援学級における具体的な自立活動等
の取組について、奥野委員から。それから、枚方市の中学校の支援学級の具体的な取組に
ついて、東野委員からお話をいただきました。

そして、今の枚方市の自立活動の取組というような、そのベースについて事務局のほう

からも御説明がございました。

支援学級における自立活動の一つの大きな特徴というのが毎日その活動に取り組んでいただけるといふようなことがあるのかなというふうに今思っております。通級指導教室ですと週に一度か二度というふうな形になるわけですが、毎日の1時間の授業の中で自立活動の時間を取り入れて、毎日毎日こう繰り返しながら、その子の成長発達を促していくというふうな取組があるのかなというふうなことです。

今日のお話を伺っていて、観点として四つほどあるのかなというふうに思っておりました。

一つ目は、小中学校9年間を見据えた自立活動の在り方、それから井村委員からありましたとおり、その先というところの将来像を見通した中での自立活動をどうしていくのかというところですかね。

それから、この自立活動の内容に関しての本人、保護者の思いであるとか共通理解をどう進めていくのかといったようなこと。

それから、三つ目は通常の学級との連携についてというふうな、様々な取組が行われていますけれども、そういったいわゆる自立活動で身につけたことを通常の学級の中でも発揮できるようにしていくということが、その子の将来につながっていくのではないかと。

四つ目は、その将来的な学びの場の選択といったようなことをどのように考えていったらいいのかといったようなことかというふうに考えられたのかなというふうに思います。

今四つほど申し上げましたけれども、委員の皆様から今日、小学校、中学校、それから事務局からの自立活動に関するお話を伺って御意見等が、あるいは御質問等がございましたらばお願いをしたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。少し刻んでいったほうがよろしければ、小中学校の9年間を見据えた自立活動の在り方というふうについては、どのように捉えられましたか。

(野口委員) よろしいでしょうか。

(会長) はい。

(野口委員) 先生方の発表ありがとうございました。すみません。今の観点についてというよりも全体について、思っているところですが、やはり、今日も先生方の子どもたちの思いを踏まえた支援というところですか、通常の学級において、子どもたちが新規で学んだことが発揮できるような、そういうサポートなどもすごくされていてすばらしいなというふうに思っていて、やはり今後の自立活動でかなり重要になってくるポイントとしては、合理的配慮を子どもたち、何度かこの会議で言っていますが、合理的配慮を子どもたち自身が自分にとって必要な合理的配慮は何か。それをどうやって意思表示していくのかということや学ぶプロセスが非常にこれやっぱり自立活動しか扱えない内容になっています。非常に重要で必須だと思います。特に、中学校においては、高校受験等においても合理的配慮の申請などをしていくかと思っておりますので、そういう意味でも本人が自己理解をし

て意思表示をしていくという。その練習の場を恐らく既に御準備されていると思います
が、全ての学校においてやっていただけるといいなと思います。

これはもう今皆さん御存じかと思いますが、今年の4月から合理的配慮というのは民間
事業者においても義務づけられておりますので、そういう意味でも、例えば自分が利用す
るお店においても別に合理的配慮を申請してもいいわけですね。そういったところも含
めて、その権利が子どもたちにあるということをその子たち自身が知らない、その権利
を行使できないので、あなたにはそういう権利があるということも含めてお伝えてして
いただくと、その子もまさにこれからの生きやすさというところにもつながって
くるかと思います。自立活動については、ちょっとそこにぜひ合理的配慮の自己理解と意
思表示というところをサポートしていく重要さみたいなところを私たちの取りまとめの中
にも入れていけるといいなというふうに改めて思いました。ちょっと感想になりました
が、以上です。

(会長) はい。ありがとうございます。野口委員、大切な御指摘いただいたと思ってお
ります。学校のこの教育というのは結構その子に対しての支援を一生懸命考えてくれると
ころですけど、世の中に出ると自分から意思表示をしないとなかなかサポートを受けるこ
とができない。そのためには、やはり自分の強み、それから苦手なところ、よく理解をし
ていながら生活をしていくというようなことというのが非常に大切かなというふうに
思っているところがございます。

そのほか委員の皆様から御意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。

はい、廣井委員、お願いいたします。

(廣井委員) はい。私は一応保護者で小学校も中学校も子どもがいまして、まさに真ん中
の子がちょっと小6でちょうど小中の連携のところに入る年齢ということもあるので、私
のほうからもお話ししたほうがいいのかなと思って今手を挙げました。

発表をお聞きしていて、うちの子どもが行っている中学校や小学校と違うところなの
で、またちょっとうちとは取組が学校内でやっぱりばらつきというか、それぞれの学校に
合わせたやり方をされてらっしゃるんだと思うので違いがあるなというふうに思いなが
ら聞いていました。

うちの小学校も中学校もだと思いますが、どちらかという子ども数が多い学校にはな
るので、なかなか今日お聞きしたような感じの手厚さがあるかということ、ちょっとうーん
というのは思いました。もちろん今いる学校もすごくできる範囲でやったださっている
とは思いますが、どうしても学校によってのばらつきというのは結構あるのかなという
のが思っていて、そうするとやっぱりみんなが平等に受けられる権利を行使できるわけでは
ないということにもなってくると思うので、児童数が多いんだっただ多いでそれなりの工
夫というのはきっとあると思いますし、少なかったらやっぱり手厚くはなると思うん
ですけど、教員不足とかもあるので難しいとは思いますが、児童数が多い学校であってもクオ
リティをある程度保障されるという状況であればありがたいなというのは感じました。

それと、あと小中の連携のことですが、私の経験で言うと今年ちょうど6年生の子どもがいますが、5年生の時点でちょっとやっぱり不安があって、お兄ちゃんがいるというのがあるので、お兄ちゃんの様子を見ていて今後長女の方はどうなるんだろうというのはちょっと感じていまして、5年生の時点で支援の担任の先生にお聞きしましたが、担任の先生は、あまり中学校のことは分からないんですというお話だったんですね。なので、6年生になると見学の会とかはあるので、そのときに聞いてもらう形になりますということでした。それで、今年になってから実際に見学会の方はあって、実際にお話をお伺いすることはできましたが、5年生の時点で先ほどおっしゃったみたいに小中の連携が行われていて聞いてもらえるということであれ、支援担任の先生ベースでも何か知ってらっしゃるということであれば、私ももう少し安心できたかなというのがあったので、ほかにもこれからの取組なのかなと思います。できればいろんな学校でそういう連携をしてもらえたらありがたいなというのは感じました。

あと井村委員もおっしゃっていましたが、その情報の少ないというのもすごく保護者としては感じていることで、一番上の中2の長男は次受験ですが、やはりその受験に関して私も不安というか、どうなるのかなというのはありますが、情報をどこからもらったらいいかもあまり分からない状態で、学校の先生だけではなくて、例えば教育委員会のこのサイトにこういうことが載っていますとか、そういうのがあれば見られるし、学校の先生だけに頼らなくてもいいような、そういう情報を得る場所があったり、そういう広報があったりするといいいのかなというのは思いました。

あと、それと最後に本人の思いの部分ですが、周りから見てどうなのか、すごくサポートが必要だろうなと思っても本人が周りから何か特別扱いされたくないというのがあって、サポートを拒否するみたいなことが結構うちの子もそうですが、そういうときがあって。なので、自分は普通じゃないって思うことが本人にとってはすごくつらいんだろうなと思うときがあります。

それは、ここにいらっしゃる方とかいろんな普通の方は支援に携わってらっしゃる方は全然そういう意識じゃないですし、もちろんそれはもう頼るべきところなんだよということ言ってくれるんですけど、それ以外の方からすると、やっぱり甘えているとか何かサポートを受けていることは間違いないんじゃないかみたいなことを言われたりすることがどうしても多いというのはあるので、通常というか普通に困ってない子どもたちもそうですし、困ってないその背景にいる大人たちみんなが、そういうサポートが要るということ、サポートが要る子どものことを偏見的に見るということが少なくなっていってほしいなというのがあるので、それはここでどうこうというわけではないですが、そういう理念をもっと広げていけるような、学校教育全体がそういうことを広げていけるようになったらいいのにといいふうにも思っています。以上です。

(会長) はい。ありがとうございました。学校間の差があるかなというようなところと、やはり情報というところの確保というところをしっかりとしていってほしいと。いろいろなところに情報源があって、そこがリンクすると良いということですかね。

そういったことについて、特に枚方の中で支援教育における研修というのが行われているかと思いますが、先ほど、小出委員の中でOJT、学校の中での様々なやり取りの中で学んでいくことというのは必要ですけど、いろんな教育委員会が設置している学びの場というのがあるのではないかと思います、その点については事務局のほうでは把握してらっしゃるかと思いますが、いかがでしょうか。

(事務局) はい、失礼します。

本年度、枚方市教育委員会のほうで行っている研修についてです。支援教育コーディネーター対象の研修が年2回、1学期、2学期にございます。また、新任の支援学級担任研修が、各校で支援教育に初めて携わるという先生向けに6月に実施されています。また、初任者研修の中で年1回、支援教育について研修を行います。

また、年次研修、5年目、8年目の先生に向けてインクルーシブ教育についてということで2学期研修が行われます。講師の先生向けに、こちらも1年目や年数の少ない先生に向けて支援教育についての研修を実施します。また、通級指導の指導者対象の研修というものも、1学期、2学期行っております。以上となります。

(会長) はい。ありがとうございます。

教職員の資質向上、スキルアップというような視点。それから情報の提供をどうしていくのかといったようなこと。たくさんの御意見をいただきましてありがとうございました。

それから井村委員、廣井委員、野口委員からありましたとおり、就学をどう考えているのか。それからその先の進路の選択といったような課題につきましては、次回、第4回の委員会の中で議論をさせていただけたらというふうに思っております。今日情報提供いただきました奥野委員、東野委員、ありがとうございました。

それから、次回に向けまして、将来のことを考えるというようなことで、それから就学についてというようなことでの検討をしていきたいというふうなことでよろしいでしょうか。

(会長) 村上委員、ご意見お願いをしてよろしいでしょうか。

(村上委員) すみません。津田小学校の奥野先生、二中の東野先生、ありがとうございました。

先ほどもお話あったと思いますが、やはりその9年間を見据えた取組ということで、やっぱり小学校と中学校との連携、引継ぎというのが非常に大事なかなというふうに感じて聞いておりました。

そして、その中で本人、保護者がしっかり納得をして思いをしっかり受け止めて納得をした上で進めていくということが非常に大事なのかなというふうに感じました。お話の中にもたくさん出ていたと思うんですが、やはりその学校間での差、あるいはその先生個人

での差というのは確かにあるのかなど。それは私も感じております。奥野先生や東野先生のように、どの先生でも同じようにできるということではないかなと思いますので、またそういったところを経験の浅い先生方にも、先ほど事務局のほうからありましたように研修なんかを行っていただいているということですが、その内容とかも充実させていくことも大事じゃないかなと感じました。簡単ですが、以上です。

(会長) はい。ありがとうございます。

それでは、続いて、牧村委員、お願いしたいと思いますが。

(牧村委員) すみません。御説明ありがとうございました。分かりやすい小学校、中学校の取組という形で。また、以前からも私ちょっと何回か発言させてもらっていますが、やはり思春期になってきたら支援学級の部分を隠したいという子どもたちのなかにはいるのかなという感じで思いながらちょっと話を聞いていましたが、今日はもう特に時間も押しています。以上でございます。

(会長) それでは、武田委員ですかね。お願いいたします。

(武田委員) 皆様どうもありがとうございました。 私がすごくいつも思っているのは、例えば、5年生の支援学級の保護者の方が中学校に気になるから相談に行きたいという話あったときに、やっぱり先々のことを心配しているんだなというふうに敏感に受け止めて、やっぱりしっかり思いを引き出せるような、思いを開示してもらえるような対応というのがすごく大事ななというふうに思います。

特に、小学校に来てすごく思うのが、小学校から中学校行くときに支援学級在籍から外れて通常の学級になっていくとかいうことを希望される話がすごく多いですが、すごいギャップがあるんですね。小中って。やっぱりそのギャップを踏まえてじっくり話できているのかなと思う場面があったりします。

ですから、支援学級の教員だけでなく通常の学級の教員も様々な支援学級の在籍の児童のいろんな事例というのをしっかり知るといのがすごく大事で、やっぱりそういう当事者意識を全ての教員が持てるような研修というのが必要かなとすごくいつも思っています。自分自身も中学校でいろいろ経験したこともありますし、小学校の校長として5年生の保護者が相談に来て、じゃあもう5年生の今からしっかり準備しましょうねというような形で何回か対応した覚えがあります。やっぱりそういうふうに丁寧に対応していくという気持ちで、校内の誰かがそういった意識で、もちろん管理職、そのとき僕も管理職だったんですけど、特に管理職はそういった意識で在職している職員にやっぱりしっかり意識持ってもらえるような、その援護射撃になるような研修があったらすごくいいなと思っています。以上です。

(会長) はい。ありがとうございます。現在、義務教育学校、小中一貫校なんかも増えて

いる一方で、やはり中学校に入ったときのギャップというのが大きいというのも事実かと思えます。そこで退級ということも考えていくというふうな難しさというのもあるという、非常に大切なお話をいただいたかというふうに思います。ありがとうございます。

それでは、渡辺委員、お願いしたいと思いますが。

(渡辺委員) はい。前回、前々回、予定が合えず出席できず申し訳ありませんでした。

今日聞いていて、野口委員が言われていた意見表明について、少しだけなんですけれども。意見表明というのは子どもの権利条約で意見表明権というのが認められていて、皆さん御存じかと思いますが、それって子どもが意見を聞いてもらう権利なんです。自分が意見を言う権利ではなくて意見を聞いてもらう権利で、前提として子どもがきちんと情報を与えられている。きちんと説明を受けて意見表明ちょっと難しいなということであればサポートをしてあげて、さらに子どもの発言どおりの結果にならないこともあると思うんですけれども、そのときはきちんとフィードバック、どういうことであなたが言っていることと違うことになったんだよということを説明してあげましょと、説明してもらう権利が子どもにあるというふうに言われていて、私はもうそのとおりで思っているところで、今後の保護者、本人の理解であったり、進路選択というところで、子どもには意見を聞いてもらう権利があるんだよという視点を入れて議論ができたらいいなと思って聞いていました。以上です。

(会長) はい。ありがとうございます。本人参加、自己決定ということが非常に大切だと言われていますので、意見を聞いてもらえる。そういったところをちょっと私たち忘れがちなところがあるかなと思って聞かせていただきました。ありがとうございます。

(会長)

それでは、皆様からたくさんの御意見をいただきましてありがとうございました。ちょっと時間伸びてしまいましたけれども、事務局からお知らせがございましたらお願いしたいと思います。

(事務局)

次回スケジュールです。次回は9月19日の木曜日の開催となります。

また、第5回枚方市支援教育充実審議会は10月24日、木曜日の開催となります。中間答申への議論となりますので御参加のほうよろしくお願いたします。以上となります。

(会長) はい。ありがとうございます。次回はすぐですね。19日ということですので。どうぞよろしくお願したいと思います。次回、先ほど申し上げましたけども就学であるとか、それから将来の学びの場であるとかいったような内容について議論を予定しております。

それでは、時間伸びまして大変申し訳ございませんでした。

以上をもちまして、令和6年度第3回枚方市支援教育充実審議会を終わらせていただきます。長時間にわたる御審議ありがとうございました。

<閉会>